

高知大学 病院 ニュース

〔編集〕
高知大学病院ニュース
編集委員会
委員長 井上 啓史
〔発行人〕
高知大学医学部附属病院
病院長 横山 彰仁

手の外科について

整形外科 上羽 宏明

手は上肢の末端に存在する、からだ全体からすると小さな部位にしか過ぎませんが、物を持つ・食事をする・服を着る・整容を行うなど日常生活の基本的動作のみならず、字を書く・パソコンのキーボードを打つ・携帯電話を操作する、更には楽器を演奏する・スポーツを行うなど人間の生活動作において不可欠の器官で、毎日の生活の中で常に使用している部位です。しかし、それはほぼ無意識的に使用しているため普段はその重要性を認識することはまずありませんが、一旦手の機能が障害されると途端に生活が不便になってしまいます。指先のちょっとした怪我をした時に、医師から濡らさないように指示され、入浴や洗顔・整容などで不便な思いをした経験のある方もおられるかもしれません。手の大きな障害を負うと、仕事や家事にも支障を来すばかりか、衣服の着脱や歯磨き、更には排尿・排便後の処理などが困難となり、精神的にも大きな負担となることがあります。健康な時には、たかが手の病気くらい大したことないと思われるかもしれませんが、手に障害を来してはじめてその不便さや苦痛の大きさに驚かれる方も多くおられます。手はヒトという生き物が人間らしく生きるために不可欠の器官です。

手は小さい器官ではありますが、その中に骨や腱・筋肉・神経・血管・靭帯などが精緻な構造で密集しており、診療に当たってはその解剖学的な構造・機能を熟知していることは当然として、通常の整形外科技術に加えて手外科特有の特殊な技術が必要とな

ります。手術治療の際には、皮膚切開線の入れ方に始まり、剥離や縫合などにおいても他部位手術とは異なった知識や技術を要します。特に剥離操作は、術後の成績に大きく影響し、通常の外科手術で行われるような鈍的剥離(手や鉗子と呼ばれる器具を使って組織を広げながら深部に進むこと)を行うと、術後に癬痕組織と呼ばれるかたい組織が大量に生じることで手の動きが悪くなる原因となります。これを防ぐためにはメスなどの刃物のみを使用した鋭的剥離が必要です。この技術は手外科で扱う微小血管やその他の軟部組織を損傷しないためにも不可欠で、手外科の重要な技術の1つです。

手指の曲げ伸ばし時にひっきりや疼痛を生じるばね指や、手くびの部分で神経の通り道が狭くなることで手指のしびれ痛み等の症状を来す手根管症候群、手指の変形・疼痛を来す変形性関節症などは非常に多く見られますし、その他にも外傷や加齢を原因として手くびの内側あたりが痛くなるTFCC損傷、手のひらにこぶのようなものができて手指が伸ばしにくくなるデュピュイトラン拘縮、月状骨という手くびの小さな骨への血流が悪くなることで生じるキーンベック病など、手外科で取り扱う疾患は多岐にわたります。前述の通り手は非常に繊細な器官ですので、素人判断による不適切な対処で逆に悪くしてしまふことがあります。その反面、手外科医による日常生活上のちょっとした指導のみで症状を軽くしたり、病気の進行を大幅に遅らせたりできることもあります。